

初期密教における病と呪法

大塚伸夫（大正大学）

インドにおける初期密教の時代は、3世紀初頭に密教の萌芽が現れてより、7世紀前半にいたるまでの4世紀半におよぶ期間である。この時代の密教的特徴を一言で表すならば「仏教呪法」と表現できる。このたび取り上げる「病と呪法」に関しては、広い意味で現世利益をになう仏教教団内における呪法のうち、治病法の一ジャンルに関わる内容となる。

初期密教は、第一期の形成期（3世紀～5世紀中葉ころ）、第二期の展開期（5世紀後半～6世紀中葉ころ）、第三期の確立期（6世紀後半～7世紀前半）を通じて、呪文唱誦といった素朴な呪法から複雑なものへと密教的に変容していく傾向にあり、治病法もまた同様の展開を示す。

三期に分かれる呪法の変容を概略すると、第一期形成期のころ、om、svāhāといったヴェーダ聖典由来の呪句、ならびにドラヴィダ系言語や意味不明の擬音で構成される非仏教的な特徴をもつ「ダラニ（大乘経典所説の陀羅尼の変化系）」と「護呪（小乗部派の伝持するパリッタ聖典からの変化系）」という、発生基盤の異なる二系統の呪文が経典に盛り込まれるようになり、それを唱えるだけの素朴な呪法が登場する。しかし、第一期終盤の5世紀前半になると、呪文唱誦の本尊対象として画像（パタ）や、修法の場となる土壇マンダラが作成され、本尊への供養法を含む「儀軌」なるものが構成されるようになる。第二期の展開期を迎えると、修法の場となるマンダラに諸尊を召喚するための印契が登場し、儀軌が一段高いレベルへと展開する。第三期になると、密教者の増員とグループ化に連動するかのごとく、息災・増益・降伏の修法や上品・中品・下品の成就法が現れて、目的別に本尊と儀軌もまた多様化する密教形態の変容が起こる。

とくに病に関しては、第一期のころは熱病などの疫病が取り上げられることが多く、効力のある呪文による呪線（護符紐）を身につけたり、泥や油といった薬の代用物を患部に塗る呪法が目につく。いずれの呪法も『アタルヴァ・ヴェーダ』を淵源とするインド古来の医的呪法（民間療法）である。また病については、その多くが病を引き起こす夜叉や羅刹といった悪鬼神が想定され、呪文の呪力にもとづいて悪鬼衆を排除したり、病人を守護する結界法も見られる。第二期になると、先の治病法が護摩法に摂取されて護摩法そのものが病気平癒の治病法となってくるが、もっとも重要な変化はこうしたヒンドゥー教的呪法が菩薩の利他行へと昇華され始まった点である。第三期になると、治病法は重視されず、もっぱら成就法や現身成仏が主流になっていく傾向である。

初期密教における治病法という呪法は、ヴェーダ聖典・仏伝・パリッタ聖典の治病行為を摂取して構築されてはいるものの、その実体はヒンドゥー教呪法であるが、初期密教が大乘の菩薩思想を摂取するようになると、治病行為という呪法も菩薩行に昇華される点は注目すべきであろう。

〈キーワード：治病法、ヒンドゥー教呪法、菩薩行〉